

平成27年度 自然史博物館活動の評価結果

平成28年8月27日
群馬県立自然史博物館

1 はじめに

本評価は、平成23年度に策定した「活動目標の評価指標表（評価指標）」を用いた内部評価であり、平成27年7月21日に公表した平成26年度の博物館活動の評価に続いて5回目となるものである。昨年度同様、本評価結果を今後の博物館活動の改善と充実につなげていきたい。

2 評価方法等について

(1) 評価指標

今回の評価に当たっては、平成26年度末までに、平成26年度の評価結果を踏まえ、平成27年度目標値の設定を行った。

(2) 評価作業

今回の評価は、昨年度に続き5回目となることを踏まえ、評価作業は職員8名によるWGが中心となって進め、素案作成後、職員全員で決定するという方法による。

(3) 結果の公表

評価結果については、全職員にフィードバックし、個々の業務改善につなげるほか、HPにて公表し、県有施設としての説明責任を果たすために役立てたい。

※ 博物館活動の評価に至る経緯、自然史博物館の使命と事業方針等は、平成23年度の評価結果を参照してください。

3 外部評価

平成22年度の「魅力ある博物館を語る会」で示された外部評価については、平成24年度の評価から導入した。異なる分野から博物館活動に造詣の深い3名の外部有識者を専門委員に委嘱し、博物館活動に対する意見をいただき、平成27年11月18日に公表した。今年度も同様に外部評価を行う予定である。

4 自己評価結果

(1) 資料の収集・保存と活用 「未来に伝える博物館」

採集・寄贈等により収集した資料の合計点数は、目標値6000点を4417点上回る10417点であった。追加される資料数は年度ごとに大きく変わるが、これは寄贈点数の変動によるところが大きい。

収集資料のデータベースは、常時サーバで運用されるとともに、定期的に磁気テープでバックアップされている。第4次システムではデータ管理の安全性を高めるため、館外のデータセンターを利用する。

一部の資料を除き、資料は温湿度管理、日常の点検、定期的な燻蒸等により、安全に管理されている。ESCO 事業完了により、収蔵庫の温湿度は新たな空調機器により管理されている。今後も微調整を加えながら適切な運用を継続したい。

収蔵スペースの不足は以前から深刻な問題となっており、第一収蔵庫・第二収蔵庫・第三収蔵庫ともに慢性的かつ深刻な課題は解消できていない。本年度末の段階では収蔵庫での資料の保存を優先するために収蔵・配架が行われたため、分類群ごとの整頓や資料を安全に出し入れできる配架、資料を運搬する動線などの配慮はできなかった。資料運搬時の動線となるべき通路や仮置きスペースにも資料が存在しており、収蔵スペースに対して資料がオーバーフローしている事は明白である。このため、資料活用時の作業には通路の標本を移動させたのち、空けた隙間で資料を運搬する。その後、一時移動させた資料はまた元にあった通路に戻さなくてはならない。現状の作業は資料を破損させる危険性が常に伴い、通常時より多大な時間と労力、及び繊細な作業が求められている。収蔵資料は今後も増え続けるため、整理、配架の努力をしながら、これからも資料の保管場所については検討を続けていきたい。

展示での公開やレファレンスによる資料活用は、年度目標をほぼ達成しているが、これに甘んずることなく、より効果的な活用を模索していきたい。

(2) 調査研究 (「魅力を引き出す博物館」)

調査研究の推進では、昨年度は3年計画で行われる奥多野及び周辺地域総合学術調査の本調査年度(2年度)で、延べ45回の現地調査を行った。この調査は平成25年度まで行われた上野村地域調査を発展させたものである。また、各職員が独自に行っている調査研究は10分野19研究、外部研究施設等と連携している調査研究は昨年度からさらに増加し43研究となった。研究成果の公表では、発表論文数19、学会等発表数20、マスコミ等への発表11であった。外部連携・招聘による講演会講座等数は25件で、例年20件前後で推移しているが昨年より6件増加した。市民参加型調査や市民連携の調査は4件と変動がなかった。博物館の調査研究全体として外部機関や研究者との連携、外部資金を利用した研究への方向性が強くなってきている。その成果としての学会発表や論文発表がコンスタントに行われていることもその成果としての現れであろう。一方でこれらの成果を著書や講演会などを通して公表に努めており、両者をあわせた数やシンクタンクとしてのレファレンス対応((6)シンクタンクとしての社会貢献参照)は高い水準で推移している。今後とも成果を出し、その公表を継続するためには、少なくとも現行の研究レベルを質と量ともに維持していく必要があると思われる。

(3) 展 示 (「知を広め、高める博物館」)

観覧者数は188,680人で昨年度の167,549人を上回った。対面式アンケートによって得られたリピーター率は62%と目標値を越えることができた。企画展示の魅力的な内容の提供と様々な媒体による広報活動を実施しており、その効果が現れており目標値を達成することができた。常設展示では63件の資料追加・更新及び機器の更新を実施した。

展示全体（A～Eコーナー）のケース内、常設展導入部他、ESCOの管理以外の部分について、電球交換を実施した。Dコーナー、Eコーナー（絶滅危惧種）壁ケース内の安定器（蛍光灯仕様）を交換した。尾瀬ジオラマ、ブナ林ジオラマ、丘陵地ジオラマ、茂林寺ジオラマ、シラビソジオラマ、恐竜骨格（マメンキサウルス）のクリーニングを実施した。シラビソについては劣化のため樹幹補修を行った。Aコーナーの顕微鏡のLED化を行った。Bコーナーのプランクトン展示エリアにおいて、顕微鏡カバー2台を交換した。また、谷川岳・高山植物パネルスイッチのパネル、尾瀬ジオラマ解説台を修繕した。Eコーナーの「私たちの地球は、いま」の背景画像および動画を更新した。映像装置については、20インチモニター機器（利根川1・2、赤城山、カッコウの托卵、モリアオガエルの産卵、群馬の亜高山、二生歯性、霊長類のロコモーション、脳の発達と言語、道具、宇宙）について、DVDプレーヤーからSDメディアプレーヤーに更新した。開館以来、大きな更新はなく老朽化が否めず、展示物が壊されること等もあることから、故障が頻発している。故障時の職員による対応は年間470回で、速やかに対処できる体勢が維持できている。

企画展は常設展にはないテーマを選定し、その時々話題性のある内容で夏、秋、春の年3回、冬には特別展を開催している。昨年度の企画展は順に「恐竜時代の海の支配者」「たべる」「よろいをまとった生きものたち」を開催した。特別展は地域支援活動「ぐんまの自然のいま」を開催した。夏は家族連れ、秋は学校団体を、春は家族連れなど一般向け、また季節を意識し展示を行っている。アンケート回答による昨年度の満足度は83%と前年の82%に引き続いて目標を上回った。予算は減少傾向にあるが、予算の確保に努めるとともに、映像撮影・編集、造作物等は可能な限り学芸職員が製作しており、クオリティも向上してきている。冬の特別展はほとんどすべてが職員による手作りである。今後さらにリピーターの方々がまた足を運んでもらえるような魅力ある展示と展示方法の工夫を積み重ねていくことが肝要であり、その努力を継続していきたい。

（4）教育普及（「知を広め、高める博物館」）

学びの魅力を感じられる事業の推進では、昨年度並みの事業を実施したが、参加者数については昨年度を10%以上上回る結果となった。また、事後アンケートでの評価も高い。サイエンスサタデーにおける魅力的な新規メニューの開発・実施、自然史講座などの講演会でのトレンドに配慮した講演内容及び講師の選定などが、参加者増につながったと考える。ビデオ上映会参加者数は2年続けて伸び悩んだが、プロジェクターの不具合によりビデオ上映会を中止せざるをえなかったことが主な要因であり、修理を急ぎたい。

学校教育支援の推進では、ビデオ上映など数項目で目標を達成していないものもあるが、教員・生徒の満足度は目標80%を上回る100%にすることができた。実地踏査において事前に館内授業の魅力を伝える努力をしたことが成果につながったと考える。さらに、館内授業の提供のしかたを工夫することで、利用しやすい館内授業をめざしていきたい。

友の会活動の会員数に大きな変更はないが、ボランティアも含め、どちらの活動も

研修や行事の質と量を充実させてきており、主体的な活動に向けた素地が醸成されつつある。

(5) 情報の発信と公開 (「知を広め、高める博物館」)

企画展や普及イベントなどの情報発信としては、新聞やラジオ・テレビなど様々なメディアを活用し行った。また、ホームページの更新やフェイスブックでの情報発信なども積極的に行い常に最新の情報を提供するよう心掛けた。ホームページでの新着情報では、1つ1つのイベントに対し事前には募集を兼ねた情報提供を行い、事後には活動内容報告をしている。ホームページのアクセス数は約316千件である。企画展毎のポスターやチラシを作成し企画展を周知するとともに図録を発行した。さらにイベントカレンダー(上期・下期)やデメテールを3回発刊した。

県広報を介した発信は51件(26年度60件)、館からの発信が150件(26年度150件)であった。

また、年3回の移動博物館や他館連携出前教室等も博物館の情報を公開する効果的な場として行っている。

(6) シンクタンクとしての社会貢献 (「知を広め、高める博物館」)

公共の博物館として、その有する様々な資源(資料、情報及び職員の専門性)を活用し、自治体や各種団体への専門知識の提供や講師の派遣など、シンクタンクとしての機能を充実させ社会貢献を果たすことは博物館の重要な使命の一つである。

学校・主任会などへの講師派遣件数は、目標値20件に対して17件(26年度28件)、学会・研究会における役員・委員等の受諾件数は、目標値5件に対して10件(26年度9件)であった。学校や主任会への講師派遣は、博物館の専門性を広められ、学会・研究会への寄与は社会貢献を高めることができるので引き続き推進していきたい。

また、博物館施設等への助言件数は、目標値10件/年に対して6件(26年度は31件)であった。今回目標値に達していないのでさらに博物館施設等との連携強化・推進をすすめたい。他の博物館等への資料の貸出件数は33件(26年度25件)と増加傾向にあった。これらの実績数は、少ない職員数のなか健闘できたと考えられる。

また、レファレンス利用者の件数が204件と昨年度147件よりも大幅に増加、目標値200件にも達することができた。引き続き専門性を求めるニーズへの対応を強化していきたい。

(7) マネージメント (経営)

平成28年度は開館20周年を迎えることから、これからの10年の館運営の基本的な考え方や理念や使命、機能、事業活動方針と事業展開方向などを盛り込んだ博物館基本構想「群馬県立自然史博物館のこれからの10年」を策定し、公表する。

安全で利用しやすい博物館施設への改善では、施設改修等は予算的な制約はあるが、開館後約20年近くになり、建物の老朽化・陳腐化が見られるので入館者の安全対策の面からも必要なものから順次対応していきたい。

情報システム関連は28年度に第四次情報システムが導入されるのでその利用等に

より来館者サービスの向上、業務効率の向上をしていきたい。

観覧者サービスの点検と質的向上では、案内業務のクオリティチェックと接客研修を継続することで、一定の水準の確保を図っているが、引き続き更なる向上を目指したい。

博物館認知度の向上と利用者層の拡大では、27年度は26年度より入館者が増えたものの、富岡製糸場の世界文化遺産登録や周辺観光ポイントの増加など周辺環境が変化する中で、常に最適な活動を目指し業務の見直しを行っていかねばならない。最適な活動をして相手にも伝わらなくてはならないので、広報活動をより効果的に進めていく必要がある。

職員の意識改革と資質の向上では、研修会・学会等への参加が少ない状況にある。予算上の制約に加え、職員の通常業務が忙しく日程確保が難しくなっている面もあるが、博物館を一層魅力的なものにしていくためにも、職員には継続的なレベルアップが求められており、積極的な取組みを呼びかけていきたい。

博物館活動への理解及び外部協力の確保は、平成28年度当初予算で平成27年度を上回る予算を確保することができた。これは、開館20周年記念展や次期情報システムを計上したことなどによるものである。また、平成27年度は公益財団法人からの助成を得て企画展をより充実したものにする事ができたが、平成28年度も同様の助成を得る予定であり、引き続き外部資金の導入に努めていきたい。

防災意識の向上と危機管理体制の強化では、危機管理マニュアルを改訂し2度の防災訓練を行った。引き続き防災訓練を行うとともに、マニュアルについては、随時必要な見直しを行っていきたい。

博物館評価システムの構築では、平成24年度分から外部評価を導入し有識者から意見をいただきHPで公開している。いただいた意見を受け止め、今後の博物館活動に生かしていきたい。